

表 3-2 悪寒発熱

	随伴症状	病態	方剤
強い悪寒・軽度熱感	頭痛・筋肉関節痛・無汗浮脈など	風寒表実証	葛根湯 麻黄湯
軽度悪寒（悪風）・軽度熱感	自汗・浮緩脈など	風寒表虚証	桂枝湯
強い熱感・軽度悪寒	咽頭痛・口渴・軽度発汗など	風熱表証	銀翹散* 桑菊飲*

③熱感が強く、悪寒は軽度で、咽頭痛・口渴・軽度発汗・浮数脈なども伴うものは、風熱表証（外感熱病の初期）であることが多い。銀翹散\*・桑菊飲\*などが使用される。

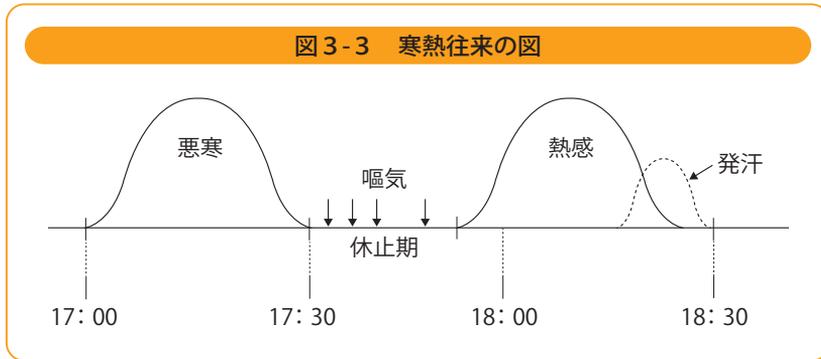
### かんねつおうらい 寒熱往来（往来寒熱）

往来寒熱ともいう。悪寒の後、悪寒も熱感も感じない休止期があり、ついで熱感が出現する熱形である（図3-3）。つまり、悪寒と熱感が時間を置いて交互に出現するものである。寒が往ってしまった後に熱がやって来るところから、寒熱往来（寒が往き、熱が来る）と名付けられた。悪寒は邪が正気に勝っているために、逆に発熱は正気が邪に勝っているために起こる。つまり正邪闘争の結果出現した症状であり、正気は未だ虚しておらず、邪も除かれていない虚実錯雑証であることを示している。傷寒病少陽病半表半裏証の重要な症状となる。その他に、瘧疾<sup>†</sup>などにも出現する。非典型ながら気滯や瘀血でもみられる。

①少陽病では、胸脇苦満・口が苦い（口苦）・咽喉乾燥・食欲減退・眩暈・脈弦などを伴うことが多い。邪が表証と裏証の間に存在（半表半裏）し、邪と正気が争うため寒熱往来が出現する。小柴胡湯などが使用される。

②気滯や瘀血によるものは、休止期が不明瞭なことや悪寒ではなく冷

図 3-3 寒熱往来の図

表 3-3 寒熱往来（往来寒熱）  
かんねつおうらい

	症状	病態	方剂
少陽病	胸脇苦満・口苦・咽喉乾燥・食欲減退・眩暈・脈弦など	邪が半表半裏に存在	小柴胡湯
気滞	脹満感（痛）・痞塞感・精神的ストレスで出現悪化などの気滞症状	気の巡行低下	加味逍遙散
瘀血	細絡・紫斑舌・舌下静脈怒脹・少腹急結・渋脈などの瘀血症状	血の巡行低下	桃核承気湯 血府逐瘀湯*

感であることも多い。これらは、ぎくしゃくした気や血の巡行のために寒熱がうまく交流せずに出現する。気滞では、脹満感（痛）・痞塞感・精神的ストレスで悪化などの気滞症状を伴う。瘀血では、細絡・紫斑舌・舌下静脈怒脹・少腹急結・渋脈などの瘀血症状を伴うことが多い。桃核承気湯・血府逐瘀湯\*などが使用される（表3-3）。

### 但寒不熱（冷感や悪寒のみが出現）（表3-4）

身体の寒さや冷え（冷感）、または悪寒のみが出現するものをいう。悪寒と冷感の区別については前述した。